

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 6 日現在

機関番号：31103

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23653250

研究課題名（和文） 地方における「キャリア教育型」高大連携の実践的研究

研究課題名（英文） A Practical Research on Career Education-Focused Collaboration between Upper Secondary and Tertiary Educational Institutions in the Provinces

研究代表者

田村 充治 (TAMURA MITSU HARU)

八戸工業大学・感性デザイン学部・教授

研究者番号：70580215

研究成果の概要（和文）：高校における「高大連携」、「キャリア教育」、「キャリアサポートプログラム（キャリアサポ）」（青森県教育委員会主催）への取組みは、生徒の進路意識の明確化、自己理解の深化などに結びついていることがわかった。とくに、「キャリアサポ」は、生徒のキャリア形成に必要な能力や態度を身に付けるためのきっかけになっており、地方の高校や大学にとって生徒と学生がともに成長するための高大連携とキャリア教育が結びついた有用な取組みになっている。

研究成果の概要（英文）：Activities on “Collaboration between upper secondary and tertiary educational institutions”, “Career Education” and “Career Support Program” (under the sponsorship of Aomori Prefectural Board of Education) can lead to the awareness of students’ future jobs and their self-understanding as well. Research findings show Career Support Program especially works out well as a turning point for students’ career building. It can safely be said that this program is a fruitful activity where “Collaboration between upper secondary and tertiary educational institutions” and “Career Education” are closely related, and moreover, the upper secondary and tertiary students in the provinces can mutually develop their career awareness.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	600,000	180,000	780,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：生涯学習、高大連携、キャリア教育

### 1. 研究開始当初の背景

(1) これまで、地方に所在する大学と高等学校との連携では、一部には高等学校における学校設定教科「大学における学修」の単位認定はあったものの、多くは、高校生の進路意識の啓発や学習意欲の向上、高校教育から大学教育へのスムーズな移行を目的に、出前授業など多様な取り組みが行われてきた。しかしながら、その多くは（特に普通高校）、「大学進学希望者」と「大学教職員」とのタテの

関係での取組みであり、大学生と大学進学希望者以外の高校生は、その対象ではなかった。

(2) 一方、社会の様々な領域において構造的な変化が進行し、就職・就業をめぐる環境が激変する中で、若者自身の資質についての課題や高学歴社会におけるモラトリアム傾向が指摘されるなど、社会全体での若者へのキャリア形成支援が求められている。このような背景から、国においても、2006年に教育

基本法が改正され、キャリア教育が教育の目標の一部として位置づけられた。また、翌年改正された学校教育法において、新たに定められた義務教育の目標の一つとして規定され、小学校からの体系的なキャリア教育の実践に対する法的根拠が整えられた。

このような状況を踏まえ、生涯学習の視点からも、高校生と大学生のキャリア発達を支援する高大連携(以下、キャリア教育型の高大連携とよぶ)への取組みの必要性が求められている。

## 2. 研究の目的

(1) 地方において、大学は、地域の教育力の向上という役割を果たすことが求められており、高等学校と大学との連携は重要である。特に、生涯学習の視点からも、キャリア教育型の高大連携の必要性が大きいとの認識に立ち、従来型の高大連携における高等学校教員やキャリア教育型の高大連携に参加した大学生・高校生・高校教員の意識等を調査・分析し、それらをもとに、キャリア教育型の高大連携推進の必要性等を明らかにする。

(2) この調査・研究の成果の有用性が明らかになったとき、進路指導中心の従来型の高大連携が、高校生と大学生のキャリア発達を支援する連携へと変貌することが期待される。とくに、地方に所在する高校や大学にとって、「キャリア教育型」高大連携への取組みは、高校と大学が学校種を超えて連続してキャリア教育に取り組むことにより、地域の未来を担う人材の育成に資するとともに、生涯学習への一歩になると考える。

(3) そのため、研究成果を高等学校や関係機関等に提供し活用してもらうことにより、高校生の自己理解の深化や大学生の生き方を見つめ直す機会が多くの場合に行われるとともに、大学外における学修の単位認定への取組みに結びついていくことを期待する。

## 3. 研究の方法

(1) 以下のプランで調査・研究を行った。

### ①2011年度

- a) 青森県内高等学校に、「高大連携」「キャリア教育」のアンケートを実施
- b) 青森県教育委員会主催の「キャリアサポートプログラム」に参加した高等学校の生徒・教員、及び参加大学生へアンケートを実施
- c) アンケートの調査・分析
- d) 実施活動状況視察と関係学会への参加

### ②2012年度

- a) アンケートの分析・考察
- b) 関係学会等への参加
- c) 県内高大連携関係会議における発表

d) 成果報告書の作成と都道府県教育委員会、及び関係機関への配布

(2) アンケートは以下の点に留意して行った。

### ① 「高大連携」と「キャリア教育」について

- a) 教員は、「高大連携」及び「キャリア教育」の取組みの意義と効果をどのように捉えているか。
- b) 取組みを、学校方針として教職員間で共有できているか。
- c) 取組み後の「生徒の変容」はあったか。

### ② 「キャリアサポ」について

- a) 参加生徒について
  - ・ 参加後の変容はあったか。
  - ・ 大学生との交流は、生徒にどのような影響を与えたか。
- b) 引率教員について
  - ・ 生徒の変容を感じることができたか。
  - ・ 生徒と大学生との交流は、生徒にどのような影響を与えたと考えているか。
- c) 参加大学生について
  - ・ 「キャリアサポ」への参加の意義を、どのように捉えているか。
  - ・ 参加前後で心の変化があったか。

## 4. 研究成果

(1) アンケート調査対象等

### ①調査対象と内容

「高大連携」と「キャリア教育」のアンケートは青森県内の高等学校を対象に平成23年6月末から8月下旬にかけて実施した。対象校の内訳は、青森県内の全77校の公立高等学校(全日制課程57校、校舎8校、定時制の課程12校)と私立高等学校17校、合計94校である。また、「キャリアサポ」のアンケートは平成23年度の「キャリアサポ」実施高校15校のうち8月以降の13の実施校の生徒・教員及び参加大学生を対象に行った。

### ②調査結果

「高大連携」と「キャリア教育」についての調査回答校の全数は89校(公立高校75校、私立高校14校)で、回収率は94.7%である。学科別では、普通科が61学科、専門学科と総合学科(以下、「専門学科等」とよぶ)が28学科、回答者別では、管理職が28名(校長5名、教頭23名)、教諭が61名である。また、「キャリアサポ」については、高校生の回答者全数は1,663名であり、男子が40.7%(677名)、女子が59.3%(986名)、学年別では、1年生が78.7%(1,309名)、2年生が21.3%(354名)である。教員の回答者全数は81名で、学級担任が55.6%(45名)、学級担任以外の教員が44.4%(36名)である。大学生の回答者全数は123名で、男子が51.2%(63名)、女子が48.8%(60名)となっており、学部系統別では文系学部が61.8%(76名)、理系学部が38.2%(47名)である。

## (2) 「高大連携」について

① 調査の結果、多くの高校では、高大連携を生徒の進学意識の醸成など、進路指導の一環として捉えており、進路指導部を中心に取組んでいることが明らかになった。また、高大連携への取組みを学年や学科、分掌等の考えで行っている高校が多く、柔軟性はあるものの、組織的・継続的な取組みができず出口指導に終わることも懸念される。その一方で、高大連携を「大学進学希望か否かにかかわらず、すべての生徒にとって高大連携は必要である。現在学習していることが、社会でどのように役立っていくのか、どういう形で社会を支えているかを体得できる場の重要性が強調されるべきである。」と捉えている学校もあり、高大連携を進路指導の一方策としてだけではなく、高校生の自己理解の深化や勤労観・職業観の確立など、高校生のキャリア発達に資するために成長過程の中に位置付けていく視点も必要である。そのためには、連携教育を教育課程に位置付け、全教職員で高大連携の取組みについて意識を共有することが望まれる。

② また、すべての高校が、高大連携は生徒や教員にとって意義のある取組みであり、生徒にとっては学習に対する動機付けや進路意識の明確化に、教員にとっては資質能力の向上に大きな役割を果たしていると捉えている。とくに連携後の評価では、すべての高校で生徒にとって「効果があった」と回答している。具体的効果としては、「学習に対する動機付けになった」「生徒の大学等への関心が高まった」「生徒の進路意識が明確になった」を挙げており、生徒にとって期待される高大連携の効果として最も多くの高校が挙げた「進路意識の明確化」とほぼ同じ結果になっている。このような高大連携についての高校の捉え方から、多くの高校では、高大連携を生徒の学習に対する動機付けや進路意識の明確化に生かすための機会として取組んでいることを窺うことができる。そして、このことは、本県(青森県)で高大連携教育を一層推進していくための望ましい取組みを「高校生の講義体験や研究室訪問」や「大学教員による出前授業」とする高校が多く、大学に期待する高大連携の具体的な内容も、大学での「講義体験や研究室訪問」を第一に挙げていることから理解することができる。

③ 2010(平成22)年度に教員対象の高大連携を実施した高校のほぼ半数で評価を行い、評価を行ったすべての高校で効果があったことを認識している。また、具体的な連携内容では、半数以上の高校が「教科指導・生徒指導などの教育内容の充実に関すること」を大学と連携して行っており、連携分野では「講演

等を通しての意識啓発分野」が最も多い。このように、高大連携は生徒に限ったものではなく、教員の資質能力の向上に大きな役割を果たしており、大学の高大連携への積極的な取組みは、高校教員の資質能力の向上に資するとともに、地方における後期中等教育の活性化に結びついていくことになる。

④ また、高大連携実施後の生徒の変容についても、事後評価を行ったほとんどの高校で「生徒の意欲が増した」と感じており、「学力が向上した」と感じた高校も2割を超えている。高校生にとって、高大連携を体験することは、これまでの日常生活では得られなかった出会いや新たな発見があり、とくに大学生との出会いは近い未来の自分との出会いでもある。したがって、高大連携実施後の評価で終わるのではなく、高校生が高大連携で得たものを、以後の高校生活の中で育て結実させていくことが大切であり、その教育を担う高校教員と地域の教育力向上を支援する大学の責務は重いものがある。

## (3) 「キャリア教育」について

① 本アンケートを通して、ほとんどの高校ではキャリア教育の重要性を認識しつつも、その取組みは緒に就いたばかりであり、様々な課題が浮き彫りになった。例えば、「教員のキャリア教育についての理解不足」や「教員の日常業務の多忙化」、「生徒の職業観・勤労観の未発達」や「産業・労働・雇用環境の変化」などが挙げられている。とくに普通科のなかにはキャリア教育に取組めない理由として「受験指導が優先されている」ことを挙げている学校もあった。キャリア教育への取組みは、大学等への進学希望者にとっても、現実の社会を意識させ、将来について考えさせるためにも必要不可欠な取組みであることを認識し、出口指導に目を奪われることなく、「生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進すること」(2009(平成21)年度告示：高等学校学習指導要領第一章総則第五款の5の(4))が必要である。

② また、キャリア教育についての自由記述による意見の中で、「現在自校で推進している教育をキャリア教育の視点で見つめ直すとともに、キャリア教育を推進するに当たっては、地域を構成する幼・小・中・高・大の連携教育が重要な役割を果たすことができる」という意見があったが、それぞれの学校には地域の中で営々として築いてきた伝統があり、保護者や地域住民に支えられてきた歴史がある。そのためにも、キャリア教育を

推進するに当たっては、自校の教育活動を構造的に再構築するとともに、地域の教育資源の活用を図り、生徒や保護者にキャリア教育の意義を積極的に発信していくことが必要である。

③ 今日、我が国では厳しい経済状況が続くなかで就業構造の変化が進んでおり、キャリア教育の推進は高校生にとって大きな意義を持っている。高校生が将来の職業や生き方について自覚し、社会的・職業的に自立するための基盤となる能力を身に付けることは、生涯学習の視点からも必要なことであり、キャリア教育に取り組んだほとんどの高校で、「生徒の満足度や意欲が増した」と感じていることや、「今後新しい意識が生まれる予感がする」と感じたという教員の言葉からも、今後の各高校のキャリア教育への取組みが期待される。このように、高校におけるキャリア教育への取組みは、生徒の学校生活の充実度を高め、生徒自身の自己理解の深化や自己受容に結びついていることを示しており、そのため継続的・組織的な取組みが必要であることを物語っている。

④ これまで、本県の高校では、その定義の難しさからキャリア教育への取組みを躊躇する学校もあったが、その重要性が認識され、今はほとんどの高校で取組むようになっていく。しかし、具体的取組み内容は、「インターンシップや職場訪問などの職場体験学習」や「オープンキャンパスなどの大学訪問」など従来の進路指導の延長上にあるため、自校の教育活動の再点検や再構築を行うなど、高校生のキャリア発達に資するための取組みの創意工夫が求められる。そのためには、校長のリーダーシップのもと、キャリア教育について全教職員が意識を共有し、大学や企業との連携など地域資源を活用した組織的・計画的な取組みが必要である。

### (3) 「キャリアサポ」について

#### ① 高校生のキャリア形成

ほとんどの高校生にとって、ワークショップ「キャリアサポ」での大学生との交流は、望ましい人間関係の構築や他者の価値観や個性を肯定的に受容することに結びつき、ひいては自己理解の深化に繋がっている。また、自分の行動段階を確認できたことは進路指導上も意義深く、主体的に自分の将来を切り拓いていく契機にもなっている。さらに、このアンケートの結果から、発達段階が男子より女子が高次であり、学年差も発達段階の差に密接に関わっていることがわかる。とくに1年生への影響や効果は大きいものがあり、早い段階で自分の夢を描き、「やる気」の向上に結びつける効果が確認できる。また若干

ではあるものの、成長段階が進むにつれて自我の確立とともに外部からの影響を受けにくくなるが見ることができる。

大学生との交流を通して、ほとんどの高校生は、「現在の自分」や「未来の自分」を考える機会になったことを実感している。とくに、高校生にとって、年齢的に身近な先輩である大学生の体験談を聞くことが、自分の将来への思いを描き、気持ちを引き締めるための一歩になっている。人生探索の重要な年代にある高校生にとって、「キャリアサポ」への参加は貴重な体験といえるが、大学生の体験談が自分の将来のために「ある程度役立った」(38.6%)を「大いに役立った」(58.2%)へ移行させるためには、長期にわたる継続的なキャリア教育が必要となる。

教員にとって、生徒と大学生との交流は、キャリア教育に取り組む上で極めて効果的であることを確認するとともに、日常の生徒の指導を振り返るきっかけになっている。「キャリアサポ」のような取組みが、各高校におけるキャリア教育の取組みへの端緒となることが期待される。

生徒と教員に共通な質問の主なものについて考察すると、生徒の行動段階を抑制的に受け止める教員の姿が浮かび上がった。とくに、担任以外では、「自分を知る段階」と「目標を持つ段階」が生徒より高く、「自主的行動の段階」では生徒より大幅に低くなっており、生徒の自己評価と教員の評価には相当の齟齬が見られる。また、ワークショップに参加することで、「生徒が変わった」と認識している教員と生徒自らが認識する度合いはほぼ一致している。一方で、生徒の場合、学年進行とともにしっかりと自分の意見を持つようになり、結果として一過性のイベントにより自分が大きく変容することはないという考えを反映した数値となっており、教員と生徒間では大きく異なっている。

また、大学生との交流が、生徒が自分を見つめ直す機会になったと考える教員が、生徒に10ポイント以上の差をつけている。これには、生徒の活動を客観的に捉えている教員と、自らの活動を主観的に捉える生徒との違いが出ていると考える。

#### ② 大学生のキャリア形成

次回以降も「キャリアサポ」への参加を希望する学生は理系学生に多い。理系学生が実験・実習などの大学過密スケジュールの中で、キャリアサポ活動に意欲を示していることは、ボランティアから受けるやり甲斐や自己発現の喜びと受け取ることができる。また、事前研修の内容については、満足度が非常に高い数値を示しているが、とくに「とても満足」している学生は、文系学生と比べて理系学生の方が一段と高くなっている。これは、平素

の大学での学修領域と異なる分野での研修に対して、新鮮に捉えられている結果と見ることもできる。「やや不満」は理系学生に特化しているが、その理由として、研修内容が一方的で、受身の研修が多く、しかも時間が長いことへの不満が挙げられる。研修内容と方法に一層の工夫と改善が求められる。

大学生にとって、ワークショップへ参加することで自己理解が進んだとする者が85%強であり参加のメリットを評価しているが、とくに理系学生にとっては自己理解の有効な手段となっている。ワークショップを成功裡に進めるためには、生徒とのコミュニケーションが欠かせないが、理系学生にとって、新たな自己発見に繋がった者が多くいたと見ることができる。実践活動で力を発揮できたかを自己採点する場合、自己の目標値の設定如何によって変化することを考慮しなければならないが、全体で65%の学生が達成感を感じている。中でも理系学生のほうが文系学生より強い達成感を得ている。一方で、「力を発揮できなかった」とする者は文系が理系の2倍を超えており、二極化の傾向を示している。全体では8割の学生が心の変化を認識しているが、その認識の度合いは女子よりも男子が、また文系よりも理系学生が大きく心の変容を認識しているといえる。大学生にとって、ワークショップは、キャリア形成のための自己鍛錬や、新たな自己発見と自己理解の深化の場となっている。従って、大学生のキャリア形成をさらに支援するためには、それぞれの所属大学の協力と、研修時間や研修内容・方法等のより一層の工夫が必要であると考え。

### ③生徒の変容等

キャリアサポに関する高校生と大学生についてのアンケートは、彼らの生の声が反映されたものであり、この活動は高校生や大学生のキャリア形成に大いに役立っている。そこで、改めて「高大連携」、「キャリア教育」、「キャリアサポ」を実施した後の生徒の変容をみると、図1のように、高大連携を実施した高校の85.2%が、またキャリア教育に取り組んだ高校の70.5%が生徒の「意欲が増した」と回答し、「キャリアサポ」に参加した高校生の94.0%が「やる気の向上に結びついた」と回答している。これを学校数と生徒数で見ると、高大連携は54校中46校が、キャリア教育は78校中55校が「意欲が増した」、「キャリアサポ」では1663人中1564人が「やる気の向上に結びついた」と回答したことになる。

このうち、「キャリアサポ」では、「結びつかなかった」と回答した生徒が3.2%の52名、「わからない」と回答した生徒が2.6%の44名で、ほとんどの生徒が「キャリアサポ」に参加したことを肯定的に捉えていることがわかる。そして、大学生の体験談が生徒の「や

る気」の向上に結びついたと捉えた教員が91.4%であり、「キャリアサポ」への参加が生徒の変容に大きな影響を与えていることをほとんどの教員が認識していることが示されている。「キャリアサポ」に参加した生徒の変容が大きい一因は、生徒と近い年齢にある大学生との関係が大きく影響しているものと思われる。大学生についても、85.4%の学生が「参加した」ことが自己理解の深化につながったと回答している。

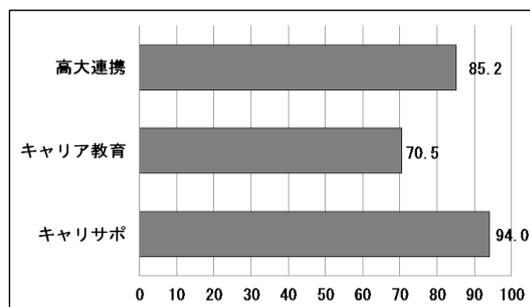


図1 生徒の変容

次に、高大連携の実施と「キャリアサポ」への参加が生徒の「進路意識の明確化」に結びついたかどうかを比べてみると、高大連携を実施した高校の63.6%が、「キャリアサポ」に参加した生徒の59.5%が「進路意識の明確化」に結びついたと回答している。これを学校数と生徒数で見ると、高大連携は33校中21校が、「キャリアサポ」では1663人中990人が「進路意識の明確化」に結びついたと回答したことになる。さらに「キャリアサポ」では、教員の61.7%が生徒の「進路意識の明確化」に結びついたと思っており、「できなかったと思う」の6.2%、「わからない」の32.1%を大きく引き離している。「キャリアサポ」について更に考察すると、「進路意識が明確になった」生徒と「生徒の進路意識が明確になったと思う」教員がいずれも約60%であるが、1500人を超える参加生徒のうち、1000人弱の生徒が「進路意識を明確にすることができた」ことは、「キャリアサポ」への参加は高校生のキャリア発達に十分資するものであり、結果的に進路指導にも有用であることを示している。このことを人間関係の視点で考えると、高大連携が高校生と大学教員との「タテの関係」であるのに対し、「キャリアサポ」は高校生と大学生の「ナナメの関係」であり、大学生との交流の中に高校生の能動的行動場面が多く設定され、高校生が大学生の体験談や交流を通して自らが描く未来に向かう意欲を喚起することに結び付いていくものと思われる。また、大学生にとっては、今の自分を確かめ、過去と現在の延長線上に自分の未来を描くキャリア形成の場となっている。キャリア教育において、「過去の自分」と「今の自分」を

振り返り、それを未来につなげていく視点は不可欠なものであり、「キャリアサポ」はその意味においても、キャリア形成の有効な場と機会になっている。

#### (4) 総括

① 高大連携とキャリア教育についてのアンケートの調査・分析の結果、県内の多くの高校では、高大連携への取組みは、生徒にとっては学習の動機付けや進路意識の明確化に結びつき、教員にとっては資質能力の向上に大きな役割を果たすなど一定の効果を挙げている。キャリア教育への取組みについては、生徒の学校生活の充実度を高め自己理解の深化や自己受容に結びついており、取組みを推進するに当たっては、大学や企業との連携など地域資源を活用した組織的・計画的な取組みが必要であるという高校教員の共通認識がある。また、高校生のキャリア形成を支援する取組みとして、青森県教育委員会主催の「キャリアサポ」について参加高校生や大学生など 1,867 名のアンケートの調査・分析を行った結果、この取組みは、高校生にとっては主体的に自分の将来を切り開くための契機として機能しており、大学生にとっても実社会に向けたコミュニケーション力等のスキルアップの場になっていることが明らかになった。

② 多くの高校生や大学生の中には、学習の目的が見いだせないままや、将来の社会生活や職業生活に対する意識が十分でないまま大学に進学する生徒や進学した学生もおり、キャリア教育を推進する目的に照らしても、実践的活動を通して、人間関係を形成するための場や機会の設定が高校や大学に求められている。とくに、キャリア教育の観点から、後期中等教育と高等教育が連携する取組みは、後期中等教育にとっては進路決定を行う生徒の支援になるとともに、高等教育機関にとっては、高等教育に進学を希望する生徒の学びの目標や意欲、将来の社会・職業生活への意識が高まることが期待される。

③ そのため、高校生や大学生のキャリア形成を支援する取組みの例として、「キャリアサポ」について調査・分析を試みてきたが、このような取組みを経験することは、高校生にとって、生涯にわたる多様なキャリア形成に必要な能力や態度を、数年後の自分の姿を大学生に投影しながら身に付けるためのきっかけになっている。そして、教育環境が都会ほど整備されていない地方の高校や大学にとっては、生徒と学生が共に成長するための有用な取組みであり、高大連携とキャリア教育が結びついた取組みでもある。

④ 「キャリア教育型」の高大連携を推進するためには、関係者の意識の共有やカリキュラムの問題、実施に伴う財政的な問題など多くの課題がある。しかし、課題を克服するための工夫を施しながら取り組むことが、高校生と大学生のキャリア発達を促し、ひいては国や地域の未来を担う人材の育成に資することとなる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

田村 充治、桃井 龍慈、地方における「キャリア教育型」高大連携の実践的研究、八戸工業大学紀要、査読無、NO. 32、2013、49-66、<https://hi-tech.repo.nii.ac.jp/>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

田村 充治 (TAMURA MITSU HARU)  
八戸工業大学・感性デザイン学部・教授  
研究者番号：70580215

##### (3) 連携研究者

桃井 龍慈 (MOMOI RYUJI)  
八戸工業大学・非常勤講師  
研究者番号：20347842